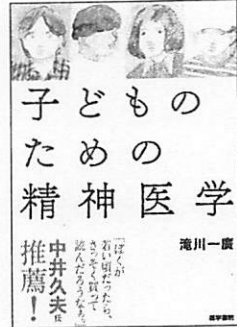




図書紹介



子どものための精神医学

滝川一廣 著

A5判・464頁・2,376円(税込)

医学書院

精神科医の著者は精神(病理)現象を、精神医学の既成の枠組みで捉えることで良しとせず、歴史的、社会的視点から相対化し、俯瞰し、思索し続けてきた。定年を間近に控え、満を持して本書を上梓した。第一部「はじめに知っておきたいこと」で、精神医学という学問の性格、精神発達とは何か、そして代表的な発達論の解説と続き、「ヒト」が対人交流を通していかに「共同性」を獲得し「人」となるかを論じる。そして第二部「育つ側のむずかしさ」、第三部「育てる側のむずかしさ」、第四部「社会に出てゆくむずかしさ」へと続く。子どもを、養育者を、そして子

育てを、さらにはおとなになることを、どのような営みとして捉えたらよいか、常に物事の本質を見極めた上でこのろの臨床に従事すべきことを、著者は懇切丁寧に読者に語りかける。臨床従事者にとって多くのヒントと支えになるであろう。ただ一言。臨床家の存在価値は治療をいかに論じるかに掛かっている。ここでは俯瞰的とともに微視的、関係論的視点が求められる。そこにこそこのころの治療の核心が潜んでいると考えるからである。読後に評者に生まれた疑問である。

(西南学院大学大学院)

教授 小林 隆児



保育者だからできるソーシャルワーク 子どもと家族に寄り添うための22のアプローチ

川村隆彦・倉内恵里子 著

B5判・198頁・2,592円(税込)

中央法規

仕事柄、子どもの発達支援のアドバイスや保護者の発達相談のため保育所に行くと、発達障害や虐待、ひとり親家庭など子どもとその家族にまつわるさまざまな問題に直面する。そこで一部の保育者が口にするのは、「お母さんが早く子どもの発達障害を理解してくれば、子どもものびるのに」といった類の嘆息である。対人援助の仕事であるはずの保育者が、職分を自ら限定し、得体の知れない「専門家」といういわばスーパーマンに問題の解決を丸投げする姿勢。私は思わず保育者であるあなたの資質や専門性は? と聞き返したくなる。

本書は、いわゆる保育者が

(富山大学人間発達科学部)

准教授 水内 豊和